

★わたしの意見

“神戸ファッション都市化協議会”の設立を

中原 武志

△K・F・S会長▽



“ファッション都市神戸”が唱えられ始めて三年になります。そして、その一環として催された「神戸ファッション市民大学」の卒業生の有志八十名が、神戸のファッション都市化を推しすすめて行く上で一役を担いたいものと（神戸ファッションソサエティ・KFS）を結成したのが昨年の六月でした。

神戸市が策定した基本構想の中では「神戸のふんいきを生かした服飾、工芸など市民の日常生活のすみずみまでいろどる新しい型のファッション産業を育て、それを支える研究教育機関を設け、企画―生産―流通―消費の流れを総合的にとらえたファッション都市をつくる」となっています。それはそれで結構なことであり大いにその実現に努めてもらいたいところだが、私の見る限りどの程度真剣に取り組んでいるのか疑問に思うのです。何故なら、それらの計画の基となる人づくりを目的に作ったファッション市民大学の卒業生に対して、その後ほとんど何のフォローもしようとしなからずです。掛声だけではないか、その様な疑問を持つのです。一日も早く各界から人を集め、神戸ファッション都市化協議会”を作り具体的な事業計画を作るべきだと思います。

掛声があつてもう三年、そろそろ本腰を入れてもいいのではないだろうか。そして各界の協力を得る為にも神戸市にファッション課か係を作って頂きたい。今の様に片手間で出来る問題ではないと思うのです。又経済界、産業界もそれぞれ自分のことばかり考えずもっと大局的に取組んで頂きたいと思うのです。

協議会で作られた計画の中で私達が協力出来るものはどしどし協力して行きたいと思っています。しかし、ファッション都市化が、単に産業の育成でなくもっと市民に目を向けたものでなければ、市民からそっぽをむかれるということをお忘れしないで頂きたい。

私達はずっと市民サイドの企画を持っているが、資金もないことなので今しばらく各界の動きを待つことによろ。



新しいと
ゆうことは
いつまでも
古くならない
ことです。



店舗づくりのプロフェッショナル

信頼される



(株)神戸日建

神戸市葦合区御幸通 3 丁目 1

PHONE 078(251)3525(代)

NIKKEN MEMORY SERIES<8>

串カツ & ナイトレストラン 帝國 昭和50年 6月30日開店

重厚なレンガ造りのモダンな欧風調はとても落ち着いた雰囲気でお客さまもほめてくれます。照明類や入口の西洋の鎧をはじめちょっとした飾りものでもうちの店と神戸日建とで相談してつくりました。2ヵ月前にオープンしたところですが年がたつにつれ益々愛着をおぼえるような洗い造りですね。

随想 三題



え・南 和好
行動美術

私の旅は

小島 清隆

△詩人△

まがりくねった峠道を登りきると、そこは深い山合いに囲まれた小さな部落がある。冬の間、ひっそりと落人のように過ごしてきたのであろうか、枯れすすきが色あせたわびしさをさらけだしているのが、何となくうらさびれているようで、もの悲しかった。

御母衣湖に白魔の如くふるまっていた白山の雪が溶けて流れ始めると、この辺一帯、濃い乳液を溶

かしたような霧の海になる。

その霧の晴れ間に、水芭蕉の花が姿を見せる。それがまるで、白い鳥となって天に駆けあがるのではないかと、そんな想いにかられるぐらい奥美濃路の春は幻想的で、孤独な自然が息づいているのだった。

葉がすっかり落ちてしまった大樹のそばに切妻造りの合掌農家があった。

その庭にこがらしに似たからっ風が吹き抜けていく。

とり入れの大根を干していた老婆の深いシワがこきざみにケイレンしてよりいつそう深くなった。

そのシワに人生の遠い愁色を見せられる思いがする。

「まだまだお寒うございますね」と声をかけると、

「いやいや寒いゆうても、このあたりじゃ、もう春じゃが、水芭蕉がきれいに咲いておましたやろ」

老婆はそういいながら、しわだらけの顔をくしゃくしゃにさせながら笑った。

山のふき、うど、わらび、こごみ、ぜんまい、赤かぶらなどの山菜を漬けたのだといってお茶うけに出してくれた。新鮮な味もさることながら、その天然の配色のあざやかさに、うっとりとなつてしまった。

霧が晴れると大粒の雨が降りだ

した。この山深い里に、春のきたことを告げる雨だという。みどりか芽生え、草花を濡らす雨の音を聞きながら、私の旅の郷愁は今そこにあるのだと知った。

この夏、たびたび訪ずれた白川郷は、あいつも変らず若者の華麗なファッションの見せ場と化し、秘境のイメージダウンをした白川自然郷の埃りっぽい荒野に成り果てていた。

私の旅は、私を見つめ自然のなかに溶けこんだ私を見つめなおす旅であるかも知れない。

勝手気ままなひとり旅、知らない人との出会い、肌を触れ合っている話のなかに、人間の共通点を見出し喜びを感じ合う。

知らない街でふと見つけたおしゃれでシックな喫茶店、一ぱいのコーヒーをすすることだって、私の旅をより豊かに充実してくれることだろう。



蛭ヶ野・庄川峠にて

旅をして旅を重ねていることが私の生きてる証明みたいなものである以上、私の旅は、あのさびれた風景のなかにしか本質的な旅の安らぎを見つけることができないし、存在しないように、思うのである。

テキサス州 ダラス

松浦 房子

△大丸ファッションコンプライネイター△

世界一の大きさを誇るフオートワース空港へ降りたのは、六月六日。その空気は、三時間程前飛び立ったニューヨークより一〇度Cも暑いと感じた。多分三〇度C以上の暑さだったと思う。広い草原の中にある突港ビルのまわりは、かげろうのように蒸気が立ち、まさに真夏の午後の景色であった。さすがテキサス、暑いなあ!!これがその時の第一声である。うす茶っぽい草原のひろがり。ながめていると、この州はどれほどに大きいのだろうか?と感じ入る。

一時間程バスに乗っていると、南国風の白い大きな建物が並んでいるところで止った。中に一步入ると中庭の美しくデザインされたダラス・トレードینگセンター――。大へん個性的なシヨール

ームと商談室、コミュニティのスペースを持ったアパレルセンターであった。二つのセンターの持つ設備や大きさ、デザイン性などは田舎のダラスを意識の下にもつていた私達をたいへんおどろかせた。とはいえ、ダラスを全然知らなかったわけではない。私の親友が一年半程すごした街であり、その弟がまだ三年目をすごしている所であるから、彼らから話は聞いていたし、便りももらっていた。

その夜は、友人が自分の家でテキサス風ステーキを食べさせてくれた。それはHIBACHIというメードインジャパンのひばち風網焼こんろの上で、まめたん(チャコール)にオイル(チャコールスターター)をかけて火をおこし、その網の上で焼くのだが、豆たんは、香りのある木から作られており、塩・こしょうの味つけのみの肉にそのけむりがまぶされて美味しく出来る。友人の家へ行った私だけが美味しいステーキを食べたわけではない。テキサス名物ステーキは街のレストランでも代表メニューであり、夕食はほとんどの人がステーキだったらしく、次の朝は、その肉の大きさなどで話題はもちきりだった。

メキシコに近いこのあたりはやはり南国。フルーツの豊富なことも日本人の私達にはうらやまし

い。パイナップル、オレンジ、マンゴ、キウイ、ぶどうetc。見たこともないくだものや、日本にあるものとは大きさがあまりにもちがいが、別の種類かと思ったものもあった。南国風レストランも多い。ポリネシア料理店とか、メキシカンバーなど。メキシカンバーで飲んだマルガリータは忘れられない。三倍ほどのワイングラスの大きな中に、テキーラとグレープフルーツジュースにかきこおりが入っているカクテル。二本のストローを入れて二人で飲むのがつたりとくる。もう夜の一二時をすぎようとしているのに、夜の空が明るくみえたのは何故だろうか。楽器をならしたり、歌ったり、踊ったり、にぎやかな夜が続いていた。帰りの車の中で友人が私にいました。

「ダラスの女の人って、可愛らしい人が多いでしょう」と、いわれ



ダラス・トレードセンターで

てみれば、先程のバーにいた女の子達の中にも目立つ程美しい人が何人かいた。メキシコに近いここでは、メキシコ人との混血の人が多く、エキゾチックで、小がらな美しい人が多いです。次の日、ごてごてとしたお化粧をしないほんとうの素顔の美しい女の人を何人かみかけた。ダラス美人、私達はそう呼ぶことにした。

洋上大学で いけばな講座

小原 夏樹

△小原流理事△

ここ数年夏休みの季節になると洋上大学あるいは青年の船といったサマーセミナーが開催されているが、今回小原流がいけばな界で初めての試みとして十日間の洋上大学を開催した。この企画は小原流の会員を対象に、神戸―香港―神戸とさくら丸をチャーターして十日間の日程で、日本全国北は網走から南は鹿児島まで約七百名の会員が参加した。いけばなといえはまず女性の稽古事といわれるように、参加した会員七百名のうち男性会員は十名足らずという結果で、講師、スタッフ、旅行社の添乗員を含めても男性は総数の一割にも満たないという文字通り女性の船になってしまった。

さていよいよ七月七日午前八時半に七百名の会員が神戸港第四突堤ポートターミナルに集合した。

ひとくちに七百名といっても実際はかなりの数である。結団式の後十時から乗船を開始して全員が乗船したのが十一時四十分。そして午後一時、それまで土砂降りだった雨もきれいにあがり大勢の人の見送るなかに五色のテープが飛び交い、プラスバンドの演奏する螢の光に送られて予定通り船は離岸した。

この洋上大学の講座はいけばな講座・教養講座・特別講座の三部門に分かれ、いけばな講座は全員必修、あとの二部門は選択とし、教養講座は美術史、文学史などでいけばなにむすびつきの深いもの、特別講座は美容、ファッションなどである。また実際に講座を開くにあたって限られたスペースしかない船内では、教室として使

用できる部屋は船底にある大きな展示室が二つしかなく、ロビーのようなパブリックスペースも殆んどないので食堂も教室として使った。講座によって受講希望を上回ったものがあり調整に手間どったが全員もれなく受講することができた。

夜のパーティで着飾ることも女性として楽しみのひとつだが、豪華客船のそれとは比べものにならないくてもその場お互いに親睦を深め、楽しい雰囲気盛り上がった。また参加者が全国各地からなので民謡大会やのど自慢を企画したところ、さばき切れない程の出演申し込みがあり、それぞれ衣装小道具まで持参という熱の入れ方だった。

さて香港での一泊二日は特に治安が悪いので自由行動は一切なしで、買物は店の前にバスを横づけし、終れば一斉に乗り込ませるといった具合で、悪名高い香港のスリもそばに近づけないようにした。狭い香港を二十二台のバスに分乗して駆け回ったが、幸い事故もなく全員乗船。しかし乗船する頃から雨が激しく降り始め、神戸と同じように雨の出港となった。午後八時オーシャンターミナルから予定通り出港し、一人一人香港での思い出を胸に遠くにかすんでいく香港の夜景に別れを告げた。



船上での救命訓練（中央筆者）

□ある集いその足あと

7/7/7

佐藤 廉 〈元町画廊〉



〈昨年の7/7/7会場風景〉

今までにそれぞれの分野で活躍

受賞してきた〈7人のサムライ〉

たち（植松奎二、河口龍夫、斉藤智、藤原向意、山口牧生、丸本耕元水定正）で7/7/7は構成されている。これら7人の作家

達は、同じ現代作家であっても、タブロー・造形・彫刻・版画・観

念・写真芸術と、その指向するところは各個であって、それらの作

品は既に各方面で展示され、論評は専門家により再々取り上げられ

評価されている。これは彼等の略歴により明確であります。

何故7/7/7という変わった名のもとに7人を集めて展覧会

を開催したかという点、一つの同じ主義主張、傾向の作家のグループでないから一つの同じ言葉（必ず意味がある）のタイトルを冠することができず、一つの同じ目標を持って制作をしていない立場の異なった7人を集めた時、間違いないことは7人が寄った人数としての7。次に展覧会が年一回作品を持ち寄って同期限内に同場所で開催することは7人とも同じであり「七夕」にちなんだ7月7日をとって7/7/7。この両方をとって7/7/7（コンピュターによる数字の7）と名付けたからであり、これなら7作家の作品主張に関係なくここに7人が連携するということを選び出した名称だからです。

ではこの「集い」の展覧会の主旨は、今の現代美術の各分野が一応揃っていること、7作家が各分野で平均以上の力量を持っていること、彼等の作家活動は色々と注目すべき成果をあげて現代美術界では尖鋭な作家として国内外で高く評価されていること、その7人がその作品を神戸で出来るだけ多くの現代社会の人達に近づけ展開し、観賞していただく機会を持つ所に重要な意義があるのである。

決して現代美術は一般の人々と無縁のものでなく、またこの作家達も現代社会の一員であって、その

中から生れ出た感覚により創作された作品、その位置から離れた別の所では成り立たない共存世界の所産であることの理解を求めたい。神戸あるいは阪神間に住むこれらの作家の7/7/7が理解のためのパイプ役としての働きかけが多少なりとも生まれるならば、とそこに重点を置いているのである。この7/7/7はその意味で主催者としての私が選出した代表者達で、普通行なわれている展覧会と少し違った意味を持っていることをご理解していただきたいと思います。それ故、私は試行展と言っています。

昨年第一回展を元町画廊で開催しましたが、本年第二回展は九月二十七日（土）～十月二日（木）まで「さんちかタウン十周年新装開店記念協賛」として、ギャラリ―さんちかで「広場のなかの現代美術」第二回「7/7/7展」として開催します。神戸の中心的ショッピング街の記念祭にオープンする場所を得られたことは、この展覧会の主旨を生かすに最適と喜んでいます。

（九月二十八日）午後三時から乾田明氏（美術評論家）と7作家達による美術説明会が行なわれます。多数のご来賓をお願いいたします。

□7/7/7連絡先

神戸市生田区元町通一丁目（元町画廊）
TEL 331-2359

おかげさまで、本年、創立五十周年を迎えることになりました。山あり、谷ありの五十年ではありましたが、これもひとえにみなさま方の変わらぬお力添えのおかげと、心から感謝しております。

■



智月堂 書

これからも、みなさまのくらしに役立つ「TOMORROW BANK」として、新しい情報の提供とたしかな明日づくりに努力してまいりたいと考えております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

おかげさまで創立50周年

もとまち大丸西向い
(078)321-1131(代)



住友信託銀行

□連載ずいそう□

『神戸の女は日本一』

—なんでかいうたら—その3

華房 良輔(放送作家)

え・貝原 六一



「あーんた この子 お寺のうらの子
夢みたような

大阪姉さんべっぴんさん

京都の姉さん まーいこさん

東京の姉さん パーレー

比較的新しいと思われる子供のまりつき唄にこんながある。阪神間でうたわれていたものだ。

六栗郡でうたわれていたのでは、「京都の姉さん
そうどすね 小さい姉さん どっこいしょ」で終
る。いずれにしろ、神戸の姉さんは出てこない。

大阪姉さんがべっぴんさんとは、いくら身びい
きでも、そうとは思えないのだが、ひょっとすれ
ば原作者は大阪の醜女嬢であったのかも知れぬ。

まったくの話、大阪は全国でも珍らしいほど、
美人の少い都会ではあるまいか。

京都はまだ、美人が点在する。さすが長年の王
城の地、一重臉、瓜実顔の美女で、色が白い。七
難もかくしてくれる。これは鴨川の水で産湯を使
ったせいではなく、京都の住宅の構造に問題があ
る。京都の家屋はウナギの寝床のように細長く、
高い塀や隣家にはさまれて、家の中や庭に陽光が
差しこまないようなシクミになっているのだ。伝
統的産業の西陣織や染色などを見ても、京女は戸
外へ出るのを極度に嫌い、屋内作業に従事する。
色白美人は病的な美であり、顔廃美につながる。
色は黒いが神戸は美人、これは健康美であり、
生産美である。

神戸はそれこそ日本で最も太陽の光を愛する都
会だ。ちょうど山々の斜面が南にむき、どの家にも
も陽光が明るくふりそそぐ。したがって、神戸の

女性は、けっして色白ではないが、現代的な美人を作り出す条件をそなえているのである。

これは、歴史的に見ても、神戸女が如何に美人を産出したかうなずける根拠がある。

ひとつは、大江匡房の『傀儡子記』にあらわされているように、その昔、朝鮮の白丁民が、西宮を中心に神戸にかけての山麓に大挙渡来して定住としたこと。この白丁民の女は、美人ぞろいであったそう。『女則為秋眉啼粧。折腰步鹵鹵。施朱伝粉……』などと、記録され、彼女らは美人であるばかりでなく、化粧上手で、しなをつくるというから、実にチャーミングな女性たちであったのだろう。

しかも彼女らは芸事がたくみで、人形を舞わし、歌や踊りに秀でていたから、土地の豪族、権力者たちは争うように妻妾に迎えたと思われる。

下って源平の時代、源氏に追われた平家一族は大量の女官、上臈、白拍子たち、つまり、当時の天下一の美女群を併って神戸に陣をかまえる。そしてひよどり越え、一の谷の戦さ敗れ、討たれし平家の公達あわれ、ほうほうのテイで逃げ出すのだが、このとき、殺すにしのびないと見たのか女房白拍子たちのほとんどを、神戸（一部は室津）におき去りにするのだ。清盛の福原遷都以来、京都の美女は全部京都に集合した感がある。『平家物語』巻五、都遷によれば、京都の要人は家を壊し、筏を作って桂川を下り、福原へ引越したとある。これすなわち、美女を追っかけていったものであるう。

源氏の世になっても、神戸が美人の地であることにかわりはない。なぜなら、平家に恩をうけた

女たちは、神戸、室津にとどまって平家の霊をとむらっていたからである。供養の花代を稼ぐために、売色にたずさわったものも少くない。それから色街の花代という言葉が生じた、という説もあるくらいだ。

江戸時代の民話、伝説にも神戸には美女の話がよく出てくる。

加えて近世以後、神戸が諸外国との交易地として発展するにつれ、純日本の美人は自然に洗練されてきた。これは感覚的に磨かれ、あるいは淘汰されるだけでなく、血が混入することも大きい。ハーフ、クォーター、1/8、1/16……とヨーロッパ、インド、あるいは中国、朝鮮の血が入る。ここでインターナショナルの現代美人が誕生するのだ。さらにさらに、風光明媚、海と山に近い芦屋、灘、神戸、須磨、明石には、明治末期以後、大阪のハイソサイティが、ぞくぞくと邸宅、妾宅または別荘を構えるようになる。

およそ、金力、権力を持った連中は、美女を探し出して妻妾に持つ傾向が強いから、必然的に、上流階級の子女は顔のいいが多くなる。

ざっと以上のような理由で、神戸にはきれいな姉ちゃんばかりになったのでありましょう。多少眉ツバの考察ではありますが、神戸の街を歩いて、やはり、きれいな人が多いと思うのであります。ほか、神戸に引越すことを真剣に考えております。

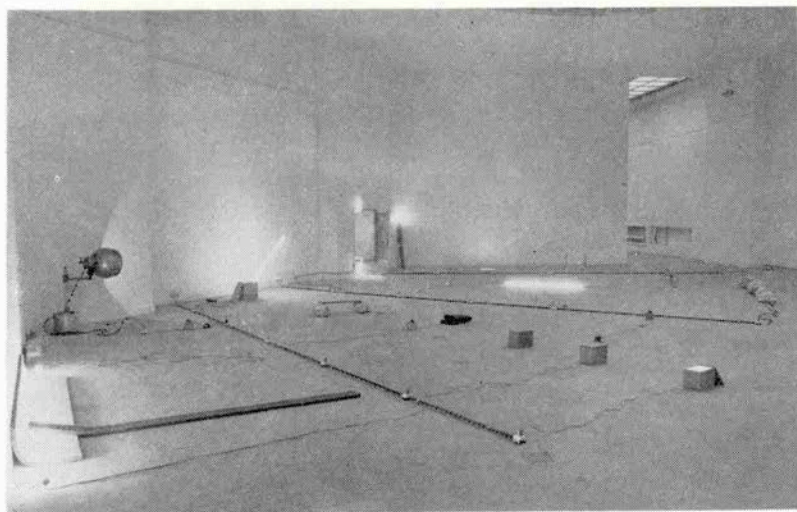


輔 良 房 華
りよう すけ はな ふき

□ある現代美術家の非芸術的なレポート〈10〉

クレーム

河口 龍夫 〈造形作家〉

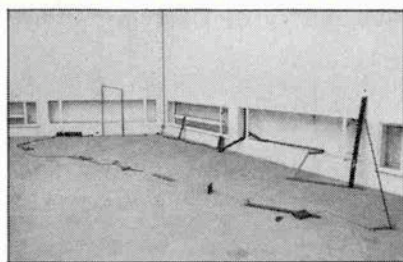


私の今回の出品作品〈Magnetic World〉、〈Relation Electriccurrent〉、〈Relation-Energy〉はほぼ完成へと向かった。〈Relation-Energy〉と題する作品を良き助手である妻と必死でセッティングしている時、一人の片足の不自由な男が、何度となく私の展示部屋にあらわれ、眼光するどく長い時間かけて見ていた。各国のアーティストが、私の部屋を通路として通っていく時に、外国語のわからない私に色々と話しかけていくのが常であった。そのような場合といささか様子が異なるのだ。私はほとんど無視して制作に励んでいた。突然、沈黙の男が私に近ずきスペイン語で話しかけ、握手を求めてきた。私はなんのことかわからないが相手は好意的であることは了解できた。あとで組織委員の一人である峰村敏明氏の話では、ビエンナーレの人選の時その人は最後迄日本側の出品作家に不賛成をとなえていた人で、君の作品を見て感じるところがあつたのだらうとのことだ。

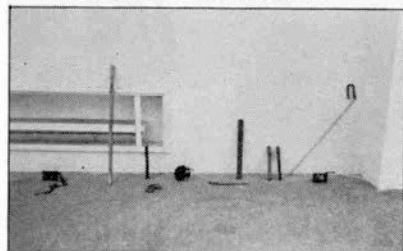
〈Relation-Energy〉と題する作品のエレメントのすべては床面と床上の空間に配置された。その状態のままでは床が作品を区切る枠のように見えた。そこで、床面より下降のエレメントが必要に思われた。天井裏の会場の下は床一枚隔てて二階の展示会場になっているのであって、床をくりぬくことはゆるされそうもない常識的な事柄と言われるのは必定であった。そこで、エレベーター

で天井裏と二階との床の厚さを目測して床に窪みをあけることにした。そして、その窪みに光のエネルギーの作品を埋めこませた。水平な床と眼の高さとの関係で、その光は見えたり見えなかったりした。窪みを掘っている時に美術館の人が来たが良識を持ってやっってもらえれば結構だとのことでした。その寛大さにほっとしたものだ。

しかしながら、おもいもかけないことがおきた。ほとんど作品の配置が終わりに発注していたネオン管もできあがり、その設置は、電気屋になにがしかの金を払って取り着けてもらった。もし私が取り着けて問題になった時困ると思ったからだ。しかし、問題はあった。今回のビエンナーレの会場の電気関係の代表的な技師から、ネオン管とトランスの位置が悪いとの指摘を受けた。何故なら、水道管のきいている例の箱状の部分に取り着けたネオン管とトランスから何らかのことで流電したなら、水道管の水を通して美術館全体に流電し大変なことになるからとりのぞけというのであった。折角、その場所の形状に合わせて作成し、水道管より離れた位置に取り着けたのに、このクレームにはまったく困った。やがて、その技師と美術館の代表者が正式に忠告をしに来た。もし、それをとりのぞかないならば、作品を全部撤去してしまうと言いきつい注意だ。フランス側より参加依頼を



＜Relation-Electric current＞



＜MAGNETIC WORLD＞

受けはるばる現地制作にやってきた作家に対して、作品の制作に支障をきたす問題があれば、共に考えて実現可能な積極的な配慮があつてしかるべきだと思ふのに、一方的な作品の撤去しか言わない観点に腹がたつた。明日は第八回パリ・ビエンナーレの特別鑑賞日なのだ。

組織委員の一人である峰村氏に相談したが、芸術上の問題ではなく、技術上の問題なので、どうすることもできないだろう。この作品は幻の作品になるかもしれないと言つて、せつせと記録写真の撮影をはじめ始める始末だ。

何度か撤去するように要求されたのがのぼすだけのばして思案した。だが、明日の午前中には、私は何らかの回答を出さねばならない。明日、特別鑑賞の前に消防署による会場全体の点検があるからだ。

どたんばになって大変なクレームがついたものだ。ネオンの作品を撤去しなければ、作品全部が撤去されるのだ。この一方的なやり方に抗議して自から参加を断念することも考えねばならないが、それではここまでやってきた苦勞の意味がなくなるだろう。その夜、遅く迄いろいろと考えたが、次のように回答することにした。ネオン管の作品はあくまで撤去しない。全作品はそのままの配置のままで、電流を自から切つてしまうこと。観客からの要求があつても電気は流さないこと。(もし必要があれば、何故電気を流さないようになったか、美術館のやり方に抗議文を作成し会場に貼る場合もあること)であつた。

寝不足の眼で早目に会場に行くと、電気技師が来て、水道の元栓を切れば良いのではないかと、言い、自からの指摘で窮地においやつたことを気の毒に思つたのか、館側の説得にあたつてくれた。消防省の検査の間は、気が気ではなく落つかなかつたが、どうやら暗黙の良解が出ることになった。これで私の作品は、他からのいかなる修正も受けずに見てもらえるのだ。

古丹波の再現を

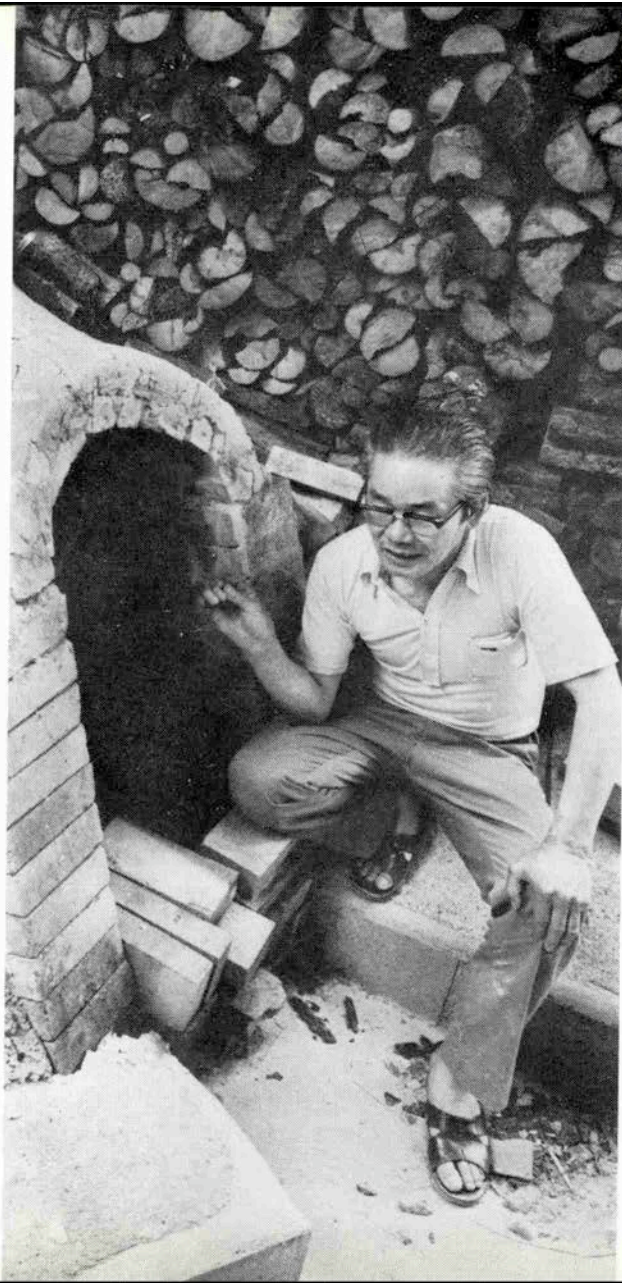
市野弘之を訪う ― 室町初期穴窯再現で逸品づくり

青木 重雄〈美術評論家・「兵庫のやきもの」著者〉

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」（小説『雪国』から）という有名な書き出しとよく似た感じをいつも抱かされるのが、丹波立杭を訪れる時である。つまり自動車で相野方面から行きながら、車がかなり高い三本峠を越え、一気に下り出すと、とたんに眼前に下立杭の窯場を中心にした、今までとは打って変わった風景がかつ然と展開する――「曲がりくねった峠を越える」と、たちまちそこは陶郷であった」と思わずつぶやきた

くなるわけだ。

これほど陶境が美しい風景に恵まれた、しかも東西両側を高い山にかこまれた孤立した谷間に川に沿って集まったところは、全国の窯場にも他に例がないことは、立杭を訪れた多くの人々が語り、また随筆などに書いているところである。車がまず通る下立杭から四斗谷川沿いに右奥へ進めばやがて両側に虚空蔵山と和田寺山の全容が迫るところに上立杭の諸窯と民家が点在する。反対



に左の道を選べば、下立杭部落の果てる地域に釜屋区域が現われる。この上立杭から下立杭を経て釜屋にいたる約二キロ半の蛇のような細長い地域こそが、かつての中世期の六大古窯のひとつ、古丹波焼のなごりの立杭窯の全容なのだ。しかも丹波立杭（兵庫県多紀郡今田町）の地理的位置が、村境が南は摂津に、西は播磨に接する丹波の西南隅にあることも、特異な環境という感じを抱かせる。

ところで立杭の地名にはいろいろと伝説があるが、今もってその由来は明らかにされていない。ただ、文字自体から見ると、「杭を立てる」ということは局部的な区切りを意味し、ひいては民間信仰の石神や道祖神にも通じると解されるもので、あるいは『多紀郷土史話』という古い記録等に「この地が丹波、播磨、摂津の国境に近く文保元年（一三二七年）に堺住吉社の社領となったため、この社領の境（主として峠）に梅、松、柳、桜、グミなどを植えて標木とし、これを立杭（たてかじ）という」とされていることなどが、立杭の地名の真相を説明するものかもしれない。

もっとも鎌倉時代から今日まで約八〇〇年間にわたって歴史的な伝統産業として焼き続けられている丹波焼も、最初は前に書いた三本峠あたりの山中で長らく焼かれていた。それが桃山末から江戸へかけて山中から山麓へ窯が移されて釜屋等で焼かれるようになり、さらにここ上立杭や下立杭に登り窯が作られて焼かれるようになったのはそれよりずっとあとの江戸中期の宝暦二年（一七五二年）以来である。丹波の古窯史はこの時代を、村里で焼いた時代なので里窯時代と説明している。だから本当の意味での丹波立杭焼の歴史は、開始以来二二〇余年ということになる。といっても丹波焼の釉薬や作品の種類が量も多種類になり、名陶工も輩出して上手物がはじめて焼かれ出したのはこの頃から江戸末、つづいて現代へかけてだから、里窯時代の焼きものこそ（骨董的、稀少価値、芸術的価値の諸問題からは一応離れて）八〇〇

年の歴史を通じて最も華やかさに富んだものといえるだろう。

この日、私は梅雨晴れというにふさわしい、日光の柔かく指す好天氣に恵まれて立杭入りをしたわけだが、いつ来ても変わらぬ四斗谷川に沿った街道を走りながらこんな静かな環境で焼きものづくりの生活を続けている（実際は昔からの半農半陶の家がほとんどだが）立杭や釜屋の人々に心からの親しみと一種のうらやましさを感じ始めていた。

訪ねる市野弘之氏（以下人名敬省略）の住居とアトリエは上立杭でも少し奥の、前にも書いた氏神住吉分社の参道（同川床の田んぼの中にある）の入り口にある、石の鳥居を少し過ぎたところの街道沿いにある。一見民芸づくり風の黒色ずくめの和様建築は延べ一三〇坪、小高い崖を利用した三階建ての建て物で、二階が仕事場と穴窯、三階が作品の陳列室と応接間、それに住居に利用されている。この家は二年前の新築で、それまでは兄の利雄の家族といっしょにここから約一五〇メートル奥の市野家に住んでいたが、この家のできると同時に移り住んで、以後兄弟は別々の仕事場で仕事をしているわけだが、以前は協同の登窯であったのに代わって、転居を機会に弘之が古丹波焼の穴窯をまねてみずからの手で築窯した穴窯を主に使っているのが、大きな特色である。

そういえば、この新居に移転早々開かれたこの穴窯の火入れ式の日、筆者も招かれて出席したわけだが、鎌倉、室町と長い年代にわたって焼成に使用された穴窯（最高温度一、二五〇度）を再現して、いわゆる古丹波の真のよさを再び実証し、それ以上のものを創造したい——と、あの時情熱をこめて語ったこの作家のことばを今も思い出すことができる。レンガを積み重ねた上を土で塗り固めてつくられたこの窯は、傾斜は三〇度、焚き口（入り口）の幅は五〇センチ、長さ約四メートル、高さ九〇センチ、三本峠などの初期の穴窯（幅二メートル

ル、長さ一〇メートル）などと比べるとむしろ小型だが、大量生産主義が第一の登窯と違い、こちらはあくまで時間をじっくりかけた精品製作が最大のネライであるだけに、すでに丹波焼を作り始めてから四〇年を迎えるという、この丹波はえぬきのペテランの新しい制作に私らも大きな期待をかけているのである。横の坂道を登るとすぐ右側の前庭の向こうに入り口がある。その入り口に「延年窯」と墨書されている。この名前は彼が日頃から尊敬している京都粟田口（粟田焼の発祥地で野々村仁清もここで焼いたと伝えられている）の青蓮院の東伏見慈治門跡に命名してもらったものである。

陶器づくり四十年のこの作家は、いわば丹波焼に半生を捧げた、まさに丹波の土と水と炎を相手に生きてきたペテラン中のペテランと呼んでよいわけだが、この人の人柄のよさがいかにも丹波人らしい純朴さとねばり強さのうえに人情味に裏づけされていることも大きな人間的魅力といつてよい。今日まで多くの地元の現代陶工たちのよい意味での代表者であり、丹波焼のスポークスマンの存在となってきたこともこの人ならではの人の人柄の反映といえる。また、他方では若い地元作家たちの信望も厚く、七、八年前から結成されている若い作家たちによる「グループ彩炎」にも加入すると同時に、先輩としてかつ指導者としての協力も果たしている。丹波焼の名は今日ではもはや全国的、国際的にも著名になっているわけだが、この人の過去の活躍が有力な素因の働きをなしてきたことは事実だろう。

大正末から戦前、戦後へかけて丹波焼の名を広く世に紹介した民芸派の柳宗悦や浜田庄司、バーナード・リーチはじめ地元のコレクショナーの中西尚古堂主人（故人、元丹波古陶館々長）等の功績はむしろ貴重なものだが、戦後の丹波焼の先駆的な陶工として伝統的な丹波焼の再現をいち早く実現して「丹波にこの作家あり」と世に知られた市野の業績も決して小さくない。特に昭和三五年に民芸協会のすすめで海外出品した彼の作品がベル

ギーのブリュッセル万博でグランプリ賞を獲得したことは丹波焼を世に再認識させるひとつの新しい刺激となったことは争われない。このほか兵庫県文化賞はじめ日陶展会長賞、全陶展大臣賞などの受賞も多いが、現在は全国的などこの会にも所屬せず、ひたすら伝統的な丹波焼の再現と新しい丹波焼の創造に没頭しながら、あわせて県美術作家協会委員として後進の指導に当たっているのがこの民芸作家の現状である。

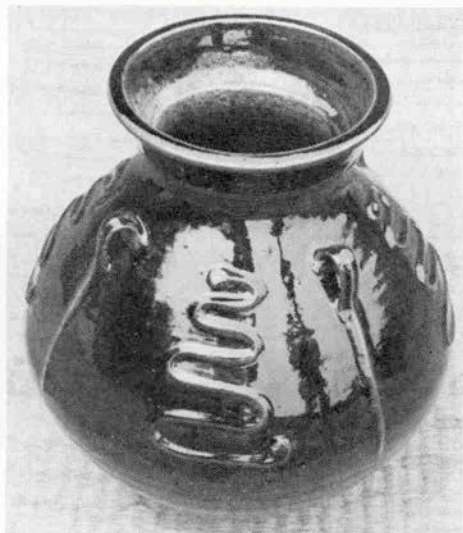
通された三階の応接間の東北側の窓からはそり立つ虚空蔵山が手にとるように真近に見える。腰をおろして室内を見渡すと、へやの三方の陳列台の上には壺、花瓶、茶碗、徳利などの諸作がずらりと並んでいる。中に抽象的なデザインのもの（技法や釉薬は伝統的なものだが）が数点混っていたが、これらはむしろこの年成の作だとのこと。彼は昭和四十六年大阪芸大デザイン学科卒業後昨年からこの家に戻ってきて弘之と協同で延年窯で焼いているとのこと、厳密に言えば延年窯はこのところ父子二人の協同窯として使用されているわけだ。すでに二代目を持つ弘之としては、新しい丹波焼の創造に大きな力添えを得たというわけだろう。

―穴窯焼成二年目の感想は。

「なかなかむずかしいことがわかりましたよ。登窯は六〇時間の焼成ですが、こちらは六昼夜ぶつづけでたきで焼くのですからね。全く寝食を忘れての仕事です。だが、思うようにならんとよけいにファイトがわいてね。しんどいが楽しいものです」

―登窯とどう違いますか。

「今でも登窯も使っていますが、これは数を多く焼くのが第一の目的です。穴窯の方はいわば量より質がねらいです。一口でいえば鎌倉から室町期までの古丹波の再現です。あの自然釉のすばらしい美観など登窯ではわりです。やはり長時間還元焰、つまり蒸し焼で焼く穴窯が必要です。だが、火を止める場合も楽焼の場合のように急冷ではなく、緩冷の方法でやらねばならぬので最



後まで火を絶やさぬように注意せねばなりません。だから、時には温度の高低の關係で窯の中心近くまで入り込まねばならぬ時がありますが、熱くて、いのちがけですよ。だから、夏は穴窯はほとんど休業です。冬こそが穴窯の活動期です。だが、冬でも雨風の日はトタン屋根の窯にまともに当たるので、身を切られぬような寒さです」

全く聞いていてもこの窯の熱さと寒さがこちらの身にも伝わってくるようだ。だが、このような苦心の末作られる諸作の貴重さがじかにわかるような気がした。

「だが、やっとよい結果が生まれた時は天にも昇るような気がしましたね。全くアマチュア陶工が処女作に見とれる喜びといっしょです。朝倉斯道（元神戸新聞社長）さんにこの話をしたら、〈新しい女房と添うたのといっしょやから、あわてずにゆっくりやることや〉といわれましたが、そんな気がしますよ」

—今までの満足作は何点ぐらい？

「残念ながら、そう多くはありません。だが、これなどは成功作です」

と言いながら、見せてもらった鉄釉の花瓶と壺は、なるほど黒褐色がいかにも完全燃焼の結果らしく、みごとに色を呈している。つづいて見せられた大ラッキョ徳利

のすばらしい染め分けの色のすばらしさには、驚きを通り越して羨望の念に捕われたぐらいだ。

—こんな色が出るものですかね。

「いやあ、全く私自身も驚いたほどですよ。赤い方は銅釉の還元炎による辰砂ですが、緑色の方は酸化炎によるものです。全く予想外の窯変の結果です。こんなものがちよいちゃいでできれば楽しいのですがね。」

—似たものができたことがありますか。

「ひさご型の徳利に辰砂のよいものができたことがあります」

このあと二階に降りて、蹴りロクロや電気ロクロを見せてもらったが、電気ロクロのすぐ横に置かれた大鉢の素焼き品にはびっくりさせられた。注文品だそうだが、口径が八六センチもある大型で、水引きだけに平日もなかったそう。並んで置かれたラッキョ徳利も大きく、高さが五五センチもある。なお、電気ロクロは量産の食器などを作る時だけに使うのだそう。

最後に筆者自身の注文で、下駄印の説明のために昔使った手ロクロを見せてもらったが、なるほどロクロの天板に下から突きさした二本の柱と表面の間に埋め木がしてあって、その埋め木の磨減ぐあいでは成形中の土が凸凹になるといふわけ。これがいわゆる下駄印の原因である。手ロクロに代わって蹴りロクロが使われるようになってから、下駄印は消失したわけである。いろいろと勉強させてもらって昼過ぎ辞去したが、きょうの立杭行での大きな印象は、市野弘之だけでなく、丹波の陶工全体が第二の転換期を迎えているということ——たとえば二六基の窯のうち二〇基は登窯、六基は穴窯で、すべてたきぎを使っていっせいに古丹波を再現しようとしている。このことは日に日にプロパンガスに切り換えることに忙しい京焼などとは全然別の行き方である。ハイヤーで近道を通って三田へ向かったが、土地の開発が進んでいるといってもまだまだ美しい自然の残っている丹波の途中の風景がとてもうらやましく感じられた。

選びぬかれた 味覚の結晶

デセール ショアジ..

かずかずの花が それぞれの美しさで
咲き誇るように デセールショアジは
ひとつひとつが すばらしい味を誇っ
ています。



古い老舗に新しい味覚

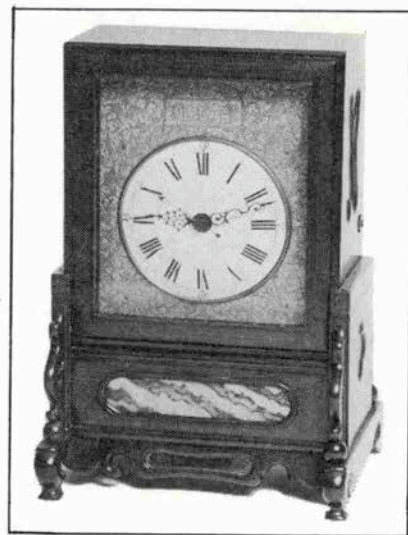


神戸 月堂

本店・神戸元町3 TEL (391) 2412
全国有名百貨店・名菓街・のれん街

刀剣 古美術 書画 骨董

視屏時計 (乾隆時代) 六五〇,〇〇〇円



鑑定 買入
刀剣研磨その他工作
一ヵ月仕上 是非ご用命下さい

神戸市生田区元町通6丁目25番地

刀古骨

剣美術
骨董

元町美術

〒650

TEL078-351-0081